



学校法人  
鎌倉女子大学

きみ せんりゅう く われ たきぎ ひろ ひろ せたんそう  
君は川流を汲み 我は薪を拾わん — 広瀬淡窓 作 —

桂林荘雑詠 諸生に示す

道を休めよ 他郷苦辛多しと

同袍友有り 自ずから相親しむ

柴扉暁に出ずれば 霜雪の如し

君は川流を汲み 我は薪を拾わん

桂林荘雑詠示二諸生一

休レ道他郷多二苦辛一

同袍有レ友自相親

柴扉暁出霜如レ雪

君汲二川流一我拾レ薪

桂林荘で折ふしに詠んだことを  
遠方から遙々学びに来た学生諸君に語って聞かせよう

慣れない土地で生活するには 辛く苦しいことも多かろう  
でも 泣き言は止めようじゃないか  
同じ綿入れの着物を使い合う親しい友も そんな生活の中で  
自然に出来たわけだし  
明け方に 粗末な戸を開けて外に出てみると  
霜が雪のように降りている  
君は川で流水を汲んできてくれたまえ  
僕は山で薪を拾ってくるから

これは、江戸時代の儒学者・教育者であった広瀬淡窓が開いた「桂林荘」という閑静な山村の学校で遠くから学びに来た学生達を思って詠んだという漢詩です。それぞれ〈書き下し文〉〈訓読文〉〈私なりの今風の意識〉を並べてみました。

この桂林荘は、ここに集まる者は皆「咸く宜し」、つまり一人ひとりが素晴らしい個性や才能を持っているという意味を込めて、後に「咸宜園」と名づけられました。

咸宜園は、吉田松陰が山口の萩に開いた「松下村塾」や緒方洪庵が大阪の船場に開いた「適塾」と並んで、今でも広く知られる九州の大分にあった私塾です。私塾とは、当時の学者や文人が自宅を開放し、師弟が言わば共同生活をしながら切磋琢磨し合う学校でした。青年達が集う大掛かりな寺子屋といってもいいかも知れません。

こうした私塾で受けた教育体験への思い出があったからでしょう、適塾で学んだ福沢諭吉は、自分が開いた学校に「慶応義塾」と名づけました。

鎌倉女子大学の学祖・松本生太先生も明治13年の生まれですから、こうした時代の学問や教養を全身に浴びて育った明治人、この時代に生まれた私立学校の創設者は皆、自分の学校にも、多かれ少なかれ、何らかこの江戸時代の私塾教育に模範的な学校のイメージを重ね合わせていたのではないかと思います。もっとも、生太先生の場合は、先生が生まれた吉備岡山の庶民のための学校「閑谷学校」の方が強い印象だったのかも知れませんが。

さて、この漢詩の最後を飾る「君は川流を汲み 我は薪を拾わん」は、こうした私塾での師弟同行、同僚相身互いの精神を象徴する一首として、ご存知の方も多かろうと思います。

ただ、これまで私は、この言葉をごく単純に皆が和気藹々仕事を分担しながら切磋琢磨する意義を説いた歌とばかり思ってきました。勿論、それは、そうなのですが、ところが最近この歌には、もっと奥の深い意味が込められているということを知りました。

教えて下さったのは、「最後の私塾創立者」と言われた玉川学園の小原國芳先生のご令孫、玉川学園理事長・学園長で、現在日本私立大学協会会長の小原芳明先生です。ある時のこと、この淡窓の漢詩のことに話が及びました。こうおっしゃるのです。「あの歌には隠れた意味があるんだよ。実はその咸宜園からは川の方が近くて、山の方が遠いんだ。つまり、自分の方が苦しく難しい仕事を引き受けようという詩なんだよ」。

言葉の表層を見ているだけでは本当のことは解らないということに、あらためて思い至ったような次第です。

[>前のページへ戻る](#)